

# 天然記念物の動物たち

藤 本 良 致

国指定の天然記念物の動物たちは、周辺の開発によって生息地を追われ、食餌を失うなどの環境の悪化によって数がだんだん少なくなり、その中のいくつかは、既に県内から姿を消してしまった。これら動物たちの姿を追ってみよう。

## 越 の 犬

越の犬が天然記念物に指定されたのは、戦前の昭和9年12月28日で、主な生息地は福井県、石川県、富山県である。越の犬は体高は50cm、体重15kgほどの中型の日本犬で、毛は赤く耳は小さくてピンと前向きに立ち獵犬に適していた。同じような中型犬で天然記念物に指定されているのは、越の犬のほか甲斐犬、紀州犬、土佐犬（土佐闘犬は別種で指定されていない）、北海道犬がある。大型犬としては秋田犬、小型のものには柴犬（主な生息地は岐阜県、富山県、長野県）がある。

これらの日本犬とよぶ在来の純血種は、だんだん数が少なくなってきているが、日本犬は主人への忠実さと、狩猟の勇敢さでよく知られている。〔日本書記〕に、白犬が主人の死体を守ってついに飢え死した話や、近年では、急死した主人の帰りを待って、10年間も渋谷駅に通い続けた秋田犬のハチが有名である。この外にも〔播磨風土記〕に、イノシシと戦って死んだ犬の話など、枚挙にいとまがないほどである。

人間が犬を飼うようになった最大の目的は狩猟であったが、近年はスポーツとしての狩猟を楽しむ人たちはふえたが、これを生計とする人は減ってきたので、在来の日本犬もこれに比例して減少してきた。越の犬は、現在絶滅してしまったと思われるが、これは戦時中に狩猟をする人たちがおらなくなったためだと思われる。越の犬が指定された当時は、奥越地方に比較的多かったのも、熊やイノシシを捕る獵師が飼っていたためである。越の犬は、本県ばかりでなく、石川、富山両県からも、現在は姿を消してしまったそうである。

## かもしか

福井市末町（旧西安居村）辺の山の中には、明治の中期ごろまでは、ガベジシという獣がいた。ガベジシのことをウタジシともいったそうだが、この獣は歌をうたうと、岩壁に立ちどまって歌に聞きいつているので、ウタジシといったそうである。また、ガベジシというのは、岩壁の近くに住んでいるので名づけられたのだということだが、このような習性から考えると、特別天然記念物のカモシカだと思われる。昔は全县にわたってカモシカが住んでいたらしく、大野郡和泉村でクラシシ、敦賀半島や美浜町新庄ではニクジシ（またはニク）とよんでいた。カモシカの皮は、馬に乗る場合

にクラの下に敷くカモに使ったので、カモシシまたはクラシシといったものである。ニクジシというのは、肉が大層おいしい獣の意味である。昔は沢山いたカモシカも、嶺北地方ではほとんど姿を消し、近年まで敦賀半島の西方岳付近にいたそうだが、原子力発電所の建設工事によって敦賀半島を追われ、現在は美浜町の野坂山辺に、僅かに残っているに過ぎない。〔日本書記巻24〕に「岩の上に小猿米焼く米だにも、たげて通らせカマシシのおじ（老翁）」の歌があるが、このカマシシはカモシカのことと思われる。

## いとよ

大野市の旧市内は、わき水の多いところで、いたるところに清水がわき出ている。この清水のわき出ているところには、この地方でハリシンとよぶイトヨが住んでいる。この魚は、通常産卵のため海から小川にさかのぼり、水草を集めて巣を作り、雌がこれに産卵して雄がこれを守るという変わった習性をもっている。島根県の浜田でタアジ、同じく杵築でハリタテ滋賀県膳所ではハリンコ、岐阜でハリウオ、金沢や山形県庄内でイトヨとよんでいる。大野市内に住んでいるのは、一年中本願清水などに住みついて、海へ降ることなくこの付近だけで繁殖しているので陸封型といって大層珍しく、昭和9年5月1日に国の天然記念物に指定された。陸封型のものは、この外にも栃木、福島両県で発見されているが、海から川へさかのぼって産卵する降海型のもは、最近の新聞紙上で騒がれるほど珍しいものではなく、県内では高浜町、小浜市、三方湖、美浜町、敦賀市、三国町、北潟湖、九頭竜川水系の春江町、松岡町などでも見られ、ハリウオまたはハリトと一般によばれているが、この魚もご多聞にもれず、毎年減少している。

このイトヨによく似た魚にトミヨがある。イトヨは体長が8cmほどで、背中離れ鱭（とげ）は3本だが、トミヨはこれよりも少し小さくて5cmくらいで、離れ鱭は8本から12本である。また、トミヨもイトヨと同じように、巣の中の卵を雄が守る。普通のイトヨは海へ降るが、トミヨは全く川だけに住み、水のきれいなわき水の近くにいることが多い。トミヨは、現在は武生市5分市町のわき水地帯にだけしか住んでいないようだが、昔は鯖江市五郎丸町にもいて、サバジャコとよんでいたそうである。

16代藩主松平慶永（春嶽）が安政5年（1858）隠居謹慎を命ぜられたため、17代藩主には越後糸魚川藩主松平直廉が転任して茂昭と改名した。茂昭は福井藩4代の光通の庶子直堅から出ている家柄であるが、この糸魚川という地名は、イトヨが沢山いたので名づけられたといわれている。

## あられがこ

九頭竜川中流の、代表的な魚にアラレガコがいる。この魚は、昭和10年6月7日大野市花房町から福井市舟橋新地先までの間が、その群棲地として指定された。アラレガコの生息地はだいたい九頭竜川の中流で、初冬の11月下旬から12月ごろの間に流れに従って河を降り、河口の淡水と海水の混っているところで産卵し、稚魚はここで成長し、鮎が河をさかのぼる頃5.6cmの大きさに

なって、河をさかのぼるようである。成魚の体長は15cmほどだが、大きいのは30cmに達するものがある。この魚は大層おいしいので乱獲され、近年は土木工事の砂利採取や工場の汚水によって、年々その数が減ってきていることは残念である。

アラレガコは九頭竜川の特産だと考えている人があるが、新潟県以南の大きい河には多少ともいるようである。標準和名のカマキリというのは高知の呼び名であるし新潟県、京都府、鳥取県などではアイカケとよんでいる。この魚はエラブタの上と、はお骨の上に対ずつのトゲがあって、このトゲで鮎をひっかけて食べるから、アイカケの名がつけられたものである。アラレガコというのはアラレガクブツの略で、



あられが降るころ腹を上にして流れを降りるからだといわれ、俳諧7部集の中の〔続猿蓑〕の中に、「カクフツや腹をならべて降る霰」の句がある。この中のカクフツは、現在のアラレガコを指すものである。アラレガコのことをガクブツともいうが嶺北地方一帯でガクブツといっているのは、ドンコというハゼ科の魚をいう場合が多い。このほかアラレガコよりもずっと小型のカジカ（方言でピシ、ゴリなどという）をいうこともある。ドンコはウロコがざらざらして濁った泥川を好み、食用にされないが、カジカは上流の冷たい水に住み、味もおいしいので、奥越地方では昔から覚味されている。金沢のゴリ料理はこのカジカのことだが、古くから有名である。

## おおさんしょうお

日本の岐阜県以西から大分県以北のごく限られた溪流にしか分布していない。全長は約1.2mに達し、両生類中最大のものである。1名ハンザキともいって半分に引き裂いても生きていられるといわれているが、この説は疑わしい。1830年にシーボルトによってヨーロッパに紹介されたが、オオサンショウウオの化石しか知らなかった当時の人びとは、生きた化石だとして大いに驚いたという話は有名である。オオサンショウウオは夜行性で、昼は川岸の水の流入する穴などにひそんでいて夜になると活動を始めるので、県内の分布状況はあまりよくわかっていないが、奥越地方と嶺南地方の山間部には、現在もなお生息しているようである。昔は丹生郡の山地にも住んでいて、今から7、80年間前福井市末町の人が、1mもあるオオサンショウウオが滝つぼに浮いていたので、肝をつぶして逃げて帰ったという話が伝えられている。昭和27年3月29日、地域を定めずに特別天然記念物に指定された。

## こうのとりの

こうのとりは丹頂鶴に似ているので鶴の巣ごもり、松上の鶴などといわれ、しばしば鶴と混同されているが、鶴との相違点は動物質の餌しか食べないことである。近年は森林の伐採によって住みかを追われ、農薬に汚された餌によって絶滅への道を歩んでいる。かつて県の鳥に指定されたコウノトリは、武生市、小浜市に住んでいたが、現在は県内に一羽も生息せずわずかに兵庫県豊岡市に数羽残っているだけである。

終わりに、越の犬とコウノトリは県内から既に姿を消してしまった。カモシカはわずかに奥越地方と嶺南の一部に生息しているだけであり、本願清水のイトヨは湧水が減って絶滅を心配されている。アラレガコは勝山から上流にはほとんどおらなくなり松岡辺で見られる程度だという。オオサンショウウオは時どき1、2尾が発見されるだけで、これらの貴重な天然記念物の動物たちが本県からいなくなるのは時間の問題であろう。国や県の強力な保護対策を強く望むものである。

福井県文化課